HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | インド再訪その2 ： 東インド・コルカタ編 |
| Author(s) | 森, 傑 |
| Citation | センターリポート, 55(1), 24-25 |
| Issue Date | 2025-04-01 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/95919 |
| Type | journal article |
| File Information | Cent Repo.55-1_24-25.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

海外訪問記

# インド再訪 その2
## ～東インド・コルカタ編～

森　傑
北海道大学大学院工学研究院・教授

### 1. はじめに

本誌231号では「インド再訪 その1」として、中央インドのボーパールをレポートした。再訪記その2となる本稿では、東インドのコルカタ（Kolkata）での滞在を紹介したい。筆者の世代は、おそらくカルカッタという呼称になじみがあるかと思う。植民地としての支配を受けた歴史を持つ国を中心に、都市名や地名を現地語に従った呼称へと変更する流れがある。コルカタも、2001年に植民地時代の英語名であったカルカッタから改められたものである。

インドは、議長国を務めた2023年9月のG20サミットで、国名を「バーラト（Bharat）」とヒンディー語で表したことで話題となった。そこにはモディ首相の政治的思惑があったと見られているが、国や地域のアイデンティティに関する認識は非常にセンシティブな時代になってきている。日本政府が、ロシアによるウクライナ侵攻を機に、ウクライナの地名の呼称をロシア語の発音（キエフ Kiev）からウクライナ語の発音（キーウ Kyiv）に基づく表記に変更したことも記憶に新しい。

### 2. ラビンドラナート・タゴール

西ベンガル州の州都であるコルカタは、日本でも知名度が高い大都市である。インドの中でも最も市域人口密度が高い都市の1つであり、街中を歩くだけで人の多さとその熱気に圧倒される。

イギリス領インド帝国時代のコルカタは、全インドの中枢として植民地政府の首都機能を担った。その行政的・経済的な成長の中で、ベンガル・ルネッサンスという文化運動が生まれ、アジア初のノーベル文学賞を受賞した詩人ラビンドラナート・タゴールを輩出した。なお、インド国歌の作詞・作曲はタゴールによるものであり、隣国バングラデシュ国歌の歌詞もタゴールが手がけた。

写真1　タゴールの住居群 Uttarayan Complex の一つ

タゴールは、英国式の教育を受けながらも、西欧へ極端に傾倒することなく、ベンガル固有の宗教や文学を探求し、インドの近代化と社会進歩、東西文化の融合を追い求めた思想家として、インド社会に大きな影響を及ぼした。特に、第1次世界大戦時の大きな潮流であったナショナリズムに対して反対を唱え、交流のあった日本に対してもその軍国主義・国家主義に警鐘を鳴らし、厳しい批判の立場を取った。

筆者のタゴール思想の理解は全くもって不十分であるが、タゴールが1901年に設立した野外学校をルーツに持つ Visva-Bharati University への今回の訪問は、冒頭で触れたインド国名表記の話題も含め、今日のナショナリズムについて考えさせられる機会となった。

### 3. サンティニケタン

サンティニケタン（Santiniketan）は、Visva-Bharati University がある学園都市であり、コルカタから北西約170km に位置する。1948年の世界人権宣言以前に、タゴールによる宗教・言語・民族を超えた革新的な共学教育が行われ、後にインドの独立を達成したマハトマ・ガンジーにも影響を与えた。インドで初めて日本語教育の講座が

写真2〜4　Visva-Bharati University 芸術学部の建物外観
写真5　芸術学部の屋外彫刻　　写真6　無造作に置かれている数々の作品　　写真7　制作に集中する芸術学部の学生

開かれた大学としても知られる。建築的にも、植民地時代の様式傾向やモダニズム建築とは異なる近代化へのアプローチを表しているとして、2022年に世界文化遺産に登録された。

大学の隣には Rabindra-Bhavana Museum があり、Uttarayan Complex と呼ばれるタゴールの5つの住居を見学することができる（写真1）。

訪問先の一つである芸術学部は、まさに“Fine Arts & Crafts”空間であった。まず目にとまるのは、建物群のユニークな外観である。建物全体がペインティングされているもの、装飾が施されたもの、外壁をキャンバスとして絵が描かれているものなど様々で、これらを見て回るだけでも非常に楽しめる（写真2〜4）。

屋外には、著名作家や卒業生の作品がいくつも展示されている（写真5）。その様はまるで美術館とも言えるが、在学生によるスタディ中のものが無造作に並べられていたり、忘れられ置き去りになっているようなものもあったり、作品の雑多でやや乱暴な扱われ方が、むしろ生き生きとした学びと創造の場として魅力的であった（写真6）。屋内では、熱心に制作にのぞむ学生とも交流でき、欲望と悩みが充満した若々しい空気を感じることができた（写真7）。

## 4. おわりに

2024年9月のインド再訪では、本誌231号で紹介した School of Planning and Architecture Bhopal と本稿の Visva-Bharati University の他にも、Indian Institute of Technology Kharagpur や Institute of Town Planner's India などで、拙著『Community Relocation, Disasters and Climate Change in Asia-Pacific Region』（COPAL Publishing, 2024）に関する講演を行った。参加者の反響は予想以上に大きく、特に学生からは、住民参加・住民主導による計画プロセスについて多くの質問があった。インド独立以降の民主主義を基盤とした芯のある国民意識と、人口増加・経済成長の勢いにのった上昇志向を強く感じた滞在となった。